紹介

末永先生古稀記念会刊
末永先生古稀記念古代学論叢

末永雅雄博士の古稀記念古代学論叢は博士の知友・門下生の方々の発起により四四名の考古・歴史研究者の論文を収めた大部の研究書として刊行された。

末永博士が著書『日本上代の甲冑』により昭和十一年度帝国学士院賞を受けられたのは既に三十年前のことであるが、昭和四十一年には博士はその「飛鳥京跡の研究」に対して朝日学術奨励金を受けられ近来ますます老練と重厚の学風を発揮されておられる。その間、一二一篇の単行本・論文等を公表され、終始学界を指導してこられたことは今更述べるまでもない。大著『日本上代の甲冑』『日本上代の武器』から、小冊子ながら博士の真髄がいかんなく発揮され戦後に古代史を学んだものに強い感鳴を与えた『池の文化』等、一つ一つの博士の作品が今日各方面に継承発展させられている。本論叢の中で八幡一郎氏は「同博士のこれまでの調査の多くは極めて大規模であり、そのいずれもが学界を稗益すること多大であってわれわれがその恩恵を蒙むること少くない」と述べられる点はわれわれ後輩のひとしく思うところである。そのことが本論叢の多岐にわたる内容にはっきりうかがわれる。まず考古学関係の論文として古墳問題に関しての秋山論文は、条里制・広範囲の地域的農業水田開発との関連で捉え、上田論文は国家権力の視点から、小島論文は土師氏研究の発展の為に、尾崎論文は文献との共同研究という視点を提出し、網干論文は大化薄葬令との関係を、伊達論文、森論文は被葬者の問題として古墳を見なおそうという積極的提言を示している。その他、今日時々刻々明らかにされる考古学発掘の成果が清水、岡崎論文でなされている。清水論文では、福島県の土城址の指摘があり、土地研究者の浮田軍団説とともに清水氏の北方に備えた軍事基地説が留意される。更に末永博士の広範な活躍をものがたるものとして朝鮮・蒙古を対象とした駒井論文、渤海社会を究明した三上論文、朝鮮の鉄製農具に関する有光論文、銅器研究史に一頁を加えた樋口論文、唐代葬制についての杉本論文も見逃せない。本論叢の第二の内容は文化・思想史の好論が収まっている点である。日本の文化史、伝統を追求したものとして浅野論文は仏堂の系譜展開から、柴田論文はわが国古代に固有な罪の観念・祓の儀礼の変化から迫られ、辻合論文は完全な万字文様の伝来を論じられる。更に石田論文は仏像甲冑の変遷から、辻本論文は刀子の問題から、宮崎論文は横川仏教の精神の継承という点から、また網干論文、小野論文は葬制の変化を通して上代人の意識・習俗に迫られる。更に本論叢は従来ややもすると古代人の創作品生産活動について生命をもたない単なる事物としかみない傾向に対する自省を迫るものとしてそうしたものを精神的側面（古代人の精神的活動の表現として）から考察したものがふくまれる。池田論文は土器を、江坂論文は土製獣類（クマ）を、大場論文は「塚」を、嶋田論文は「朱」色の問題を取上げる。以上の諸論文にももちろん秀れた新しい研究視角・研究方法が提示されているが、大庭論文は邪馬台国論争に古文書学からの提言を、三木論文は銅鐸研究の新しい試みを、澄田論文はサヌカイト分布をもとにした大和と

伊勢地方の交流についての新しい手がかりを指摘し、坂本論文は駅の立地条件として地方の中心的集落であることに注目され駅制研究の新しい役割を提言され、斎藤論文は国分尼寺の検討を提唱して従来の国分寺研究のカタワな状態に忠告された。また三品論文は困難な朝鮮封建制度の研究方法として、逆にその成長を妨げる条件の検討を提唱された。以上の諸論文のもつ歴史研究の可能性から学ぶところが多い。第三の内容は以上にもいくつか触れた文献史学の諸論文である。史料批判を行うものとして、平山論文は法隆寺に関する文献を、小笠原論文は茶酒論を紹介検討する。吉永論文は史料にみる言葉の意味の変化への留意とその歴史過程について指摘され、二葉論文、横田論文は書紀編纂過程と原史料との関係を、薗田論文は散失した日本書紀系図一巻が帝王系図であったことをつきとめたものである。歴史内容にふみこんだものとして、井上論文は推古期の諸問題の再検討の必要性を述べ、岸論文は県犬養三千代の本貫を河内に比定する見解から、天平元年の変での藤原氏の役割、東大寺創建における光明皇后の役割を指摘した。直木論文は代々の都宮の大極殿の門の変化を律令体制形成過程の天皇の権力構造の変化の問題として捉えたもの、角田論文は律令体制下の日本において兵士から将軍へという至難な特進をとげた池原綱主を通して律令国家の展開にふれた好論である。本論叢は学問成果という側面からいっても以上の如く充実した論稿に満ちているが、特に指摘しておきたいのは研究者の姿勢・心がまえともいうべき点で大きな内容をもつということである。日本美術史研究の再検討を問う下店論文は歴史研究の前進の為に常に自己批判をし、学界全体としての発展を生みだす為に全ての研究者は大局の立場に立つことを要請している。大場論文は有名な古墳や経塚でさえ土地開発の鍬光にかけられている現在「野の文化財」は風前の燈火であると述べ文化財保護の為の正しい視点を提起している。主神の成立に関する肥後論文は、太平洋戦争の経験から「研究の自由」の得がたいことを述懐され、八幡論文は、新しく弥生社会の紡錘車の体系的研究にとりくもうという考古学研究への情熱をひしひしと感じさせるものがあり、更に多くの研究者とともに氏のこれからの仕事を進めていく姿勢に、われわれ後輩は多くの教訓をうる次第である。博士がわが考古学界に寄与された数々の業績とともに、後生誘掖の功を高く評価されるゆえんをみる。末尾になったが本論叢収載の論文は次の通りである。

前方後円墳の企画性と条里制地割　秋山日出雄
日本仏堂建築の系譜　浅野　清
大化甲申詔にみえる墳墓の規制について　綱干　善教
朝鮮半島における鉄製農具の変遷について　有光　教一
瓶尊と古代人の情緒　池田　源太
仏像のよろい　石田　茂作
推古朝の諸問題　井上　薫
前方後円墳の兆域の諸問題　上田　宏範
縄文土器文化後晩期の熊と思われる土製品について　江坂　輝弥
歴史時代における「塚」の考古学的考察　大場　磐雄
「卑弥呼を親魏倭王とする制書」をめぐる問題　大庭　脩
漢代における池溝開発とその遺跡—安徽省寿県安豊塘遺跡—　岡崎　敬
敦煌本「茶酒論」について　小笠原宣秀

古墳考察のための文献資料の一解釈　尾崎喜左雄
東大寺献物帳について　小野　勝年
県犬養橘宿禰三千代をめぐる臆説　岸　俊男
土師四腹と古墳　小島　俊次
麒麟考　駒井　和愛
国分僧寺と国分尼寺との距離及び方位に関する一考察　斎藤　忠
大和の古駅　坂本　太郎
古代の罪と祓についての再考　柴田　実
古墳に遺存する朱について　嶋田　暁
福島県真野古墳群　清水　潤三
日本美術史の誤謬、改訂、及び問題点に就いての覚書　下店　静市
唐代の葬制について—唐代墓葬考序節　杉本　憲司
伊勢湾沿岸に分布するサヌカイト（讃岐岩）について　澄田　正一
日本書紀の系図について　薗田　香融
古墳・寺・氏族　伊達　宗泰
万字文様について　辻合喜代太郎
刀子考　辻本　直男
池原綱主　角田　文衛
大極殿の門　直木孝次郎
ブランデージ・コレクション銅器に関連して　樋口　隆康
日本の主神　肥後　和男
古今一陽集撰者考　平山敏治郎
元興寺縁起と日本書紀　二葉　憲香
高句麗と渤海—その社会・文化の近親性—　三上　次男
中形袈裟襷文銅鐸について　三木　文雄
朝鮮における封建制度　三品　彰英
横川仏教の一齣　宮崎　円遵
葬法の変遷よりみた古墳の終末　森　浩一
弥生時代紡錘車覚書　八幡　一郎
孝徳紀白雉元年条の文体と用語法　横田　健一
允恭紀の歌に見える「時時」の読みと意味とを中心にして　吉永　登

（B5判　六九四頁　昭和四二年一〇月
七〇〇〇円　末永先生古稀記念会刊）
（野田嶺志）

例会予告

日時　十月五日（土）　午後一時より
場所　京都大学　文学部第一講義室

漢籍の紙背文書について　竺沙雅章氏
織豊政権の問題点　朝尾直弘氏

一九六八年四月二五日印刷
一九六八年五月一日発行　定価三〇〇円
史林（第五一巻第三号）
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
発行人　史学研究会
振替京都五一五五番
理事長　井上智勇
京都市下京区西七条御所ノ内中町五〇
印刷所　中村印刷株式会社